

➤ 視力とは「二つの違うものを識別できる力」

眼鏡やコンタクトレンズをつくるときには、まず視力を測定して自分に合った度数を計測しますが、その視力とはなにを意味するのかを知る人は少ないように思います。ほとんどの人は視力を「遠くまで見える能力」と考えているようですが、それが正解ではありません。

古代アラビアでは、「視力」の概念は北斗七星のミザールという星と、その星の伴星であるアルコルという星を見分けることができれば視力が健常であると判断されました。

つまり「視力」という概念には、「ものを見分ける能力」という意味を前提としています。たとえ見ることができても、それがどのような形をしているのかを認識できなければ、視力がよいとはいえないのです。

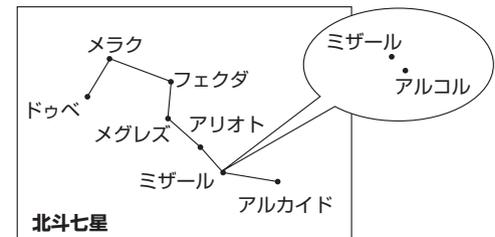
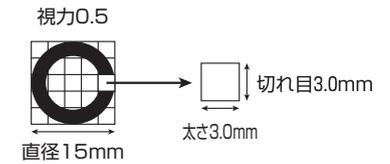
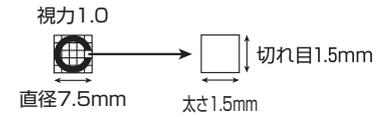
視力検査では、アルファベットの「C」に似た形の環を見て、その切れ目が上下左右どちらを向いているかを答えます。このマークをランドルト氏環とよびます。19世紀のフランスの眼科医、エドモンド・ランドルトにちなんで名づけられました。日本ではかつてひらがなを用いた視力検査が行われていましたが、現在では世界共通の視標であるランドルト氏環を用いています。

ランドルト氏環の切れ目は、1度の60分の1である1分の角度に相当します。これは北斗七星のミザールとアルコル間の隙間に当たります(図●)。これを見分けることができれば「視力1・0」と定められています。

視力検査では、5メートル離れた位置からランドルト氏環を見て、切れ目の両端にあたる2点がどのくらい小さい幅の状態まで見えるかを調べます。環の直径は7・5ミリ、幅1・5ミリ、切れ目の幅1・5ミリのランドルト氏環を標準として、それを5メートル先から見分けられれば視力は1・0です。この1・5ミリの切れ目は、5メートル離れた場合、かなり狭い視角といえ、今の時代、これが見分けられる人は視力がよいといえるでしょう。

離れる距離が5メートルと定められているのは、5メートル以上先のものを見る時が、眼に負担が最もかからない状態だからです。その状態でランドルト氏環の切れ目をどこまで認識できるかを測定するわけです。

図2-4 ランドルト氏環



提供：(株)メガネスーパー